農村伝道神学校学報
学校法人鶴川学院
農村伝道神学校
発行人 高柳 富夫

「キリスト教を信じないで キリスト教を信じる」

マタイ二八：一六－二〇

牧師　平良愛香
（三・一教会、日本基督教団神奈川教区総会議長）

私は都内の大学で「性倫理とキリスト教」という講座を担当している。キリスト教がどれだけ多くの差別や排除をしてきたか。とくに性倫理に関して、「性はこうあるべき」という強い価値観を築き上げ、それにそぐわない性を否定、断罪してきた。産むことを目的としない性を否定し、セクシュアル・マイノリティだけでなく、産めない・産まない人たちを排除してきた。結婚を絶対化することで、シングルを不完全であるかのように扱い、結婚後はパートナーの暴力に耐えることを強要し、離婚を罪とした。シングルマザーに対して、手を差し伸べないどころか、石を投げるような仕打ちをすることもある。神学的には父なる神を無批判に（あるいは意図的に）用いることで、「父」＝権威という錯覚を浸透、固定化させ、イエスの母マリアの処女懐胎のメッセージ（聖書には書いてないにも関わらず）によって、処女が「清いもの」であるという価値観をも固定化させてしまった。キリスト教は本当に罪深い宗教である、と。

キリスト教批判をするため、多くの学生から質問を受ける。「どうしてキリスト教を信じているのですか」。返答「私はキリスト教は信じていません。キリストを信じているのです。私たちを造って、すばらしいものができたと言って喜んだ神が、全力をかけて私たちを愛している。たとえ自分で自分を肯定できないときにすら、絶対的な存在である神が、私を肯定してくれている。そのことを教えてくれたイエスを、自分の救い主として信じようと思ったんです。」

「キリスト教を信じる」という言葉が「キリスト教は間違いないと思っている」という意味なら、私は「信じていない」と言うしかない。歴史の中でたくさんの間違いを重ねてきた宗教だし、おそらくこれからも重ねるのだろう。「聖書に書いてあり、キリスト教でそう教えているから、これが正しい」と言われて、同性愛者である私はさんざん傷ついてきた。そのおかげで、幸いなことに「キリスト教を疑う」という大切な視点を得ることができた。私がキリストを宣べ伝えるのは、それが正しいからではなく、あくまでも、私がそこで救われたからだということを思い出さねばならない。

マタイ福音書の終わりの言葉。私にはどうしても「正しいからキリスト教を広げろ」とイエスが言ってるようには思えない。「あなたは私と出会って、命を得たでしょ。それじゃ黙ってられないでしょ。さあ行って語りなさい。待ってる人がいるから。」「本当に正しいのだろうかという躊躇もあるでしょう。大丈夫、何度でも軌道修正できるから。私が一緒にいるのだから！」

一七節にとても興味深い言葉が入っている。「しかし、疑う者もいた。」全員がイエスを一〇〇％信じて従って来たわけではない。疑いながらもやって来た人たちがいた。疑いつつ、それでもイエスと出会った経験を忘れられなかったのではないか。イエスは、「信じる人たちよく来たね。疑う人は帰りなさい」とは言わない。疑う人たちがそこに含まれていることを知りつつ、その人たちに近寄って、語りかけたのだと思う。「それでいい。あなたが信じていること、わたしから学んだことを思い出して人々に伝えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

キリスト教の教えを鵜呑みにしたり絶対化したりしてはならない。私たちはキリスト教を正当化するのではなく、疑いながらも、むしろ疑いを大切にしながらも、それでもイエスと出会った出来事の中に、神の愛の迫り、神の国の実現の希望を思い出すことができる。「人間よりも神が大切」であるかのように、人間を疎かにして神をあがめる宗教ではなく、神学や規則で縛って正当化する宗教でもなく、一人ひとりの人間を大切にすることこそ神の国の実現であると神が宣言している宗教。武力ではなく、また言葉で相手を組み伏せるのでもなく、人間同士の信頼によって和解が成立し神の国が実現する。そ

の方向をキリスト教は指し示す。私は学生たちにいつもこう説明している。「キリスト教は完成していない、成長途上の宗教です。けれどその先に、福音の実現を信じている。問題も多いけど方向性を示してくれている。だから僕はキリスト教に留まることができるのです。」

キリスト教は自己反省を繰り返し、軌道修正を重ねながら、神の国の実現に近づくことができる教えを持っている。そのことを私は信じている。それを一言で言うならば、「キリスト教を信じる」ということかもしれない。

疑いながらも、落ち込みながらも牧師をしている中でいつも立ち戻されるのは、「わたしが出会ったイエス・キリストは、疑っている人を用いられる」ということ。しっかりキリスト教を疑っていきたい。そういう私たちに、「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと一緒にいる」とおっしゃる方がいる。

（卒業式メッセージより）

農村伝道シンポジウム報告

一年　井口拓人

今年の農村伝道シンポジウムは、伝道における実践事例と本校の果たした役割というテーマで、戒能信生先生をお招きして講演をうかがった。「農村伝道神学校を担った人々」というタイトルのもと、主に木俣敏、室野玄一とその背景となる歴史事情をひもとく講演の要約を紹介させていただく。

プロテスタント・キリスト教の伝道は、当初は農村地域でも、地主や氏族など、いわば、中産、知識人階層を中心に広められた。しかしながら、家制度などキリスト教にそぐわない文化のために宣教対象は都市部へと移行する。農民は宣教の対象にはならなかったが、とりわけ昭和初期の農村の困窮は深刻で、今日でいう支援、救済の対象として都市のキリスト教会には認識されていた。そういう事情の中で、賀川豊彦や杉山元次郎らは、農民組合運動、農民福音学校を展開し、農村・農民に働きかけ、木俣敏、室野玄一などが排出されたのである。

室野玄一は、満州開拓団に指導者として抜擢されたが生前黙して語らなかった。戦時下日本は、満州に覇権を拡大するために、満蒙開拓計画を定める。しかしそれは事実上開拓ではなく元々この地に戦争の難を逃れて住んでいた中国人朝鮮人の耕作地に開拓団は入り込んだのである。これは結果的に無残な失敗に終わった。その事情に関する開拓先遣隊の名簿をはじめ様々な資料により、指導者としての責任が問われた。本校の創立に関わった先達室野は、戦前の農村伝道者であり、満州開拓に関わったという事実は、戦後も不問のままだった。農村伝道神学校が教育方針に戦争責任告白を明確に位置づけるようになってからも、これを検証することはなかった。

木俣敏は、教団の農村伝道二五カ年計画の中で設立された中央農村教化研究所において、戦後は農村に宣教の可能性を見出し伝道圏伝道を推進した。はたしてこれは空振りに終わるが、教団の宣教理念の土台として受け継がれていった。そのような中、六〇、七〇年代は教団に寄せられる北米からの潤沢な資金により、本校は排他的に優遇された。しかし同時に、使途不明金などの経理の問題が発覚する。組織上第三者的な外郭の監査システムがなく、真相は公にされなかった。ただ本校の指導者たちは、その人望から察せられるに作為的に不正に手を染めるものではないといえるが、沈黙のうちに、責任を負って本校を去っていったのである。その後、機構改正により、農村伝道委員会は解散され、資金も途絶えた。これによって、農村伝道神学校は財政的に窮地に立たされ、営利農場の廃止、保育科の廃止という苦しい時代を通ってきたのであった。

このような歴史を踏まえて、課題が三つ挙げられる。第一に、農村伝道神学校の歴史資料を収集、整理、保管する。第二に、本校の卒業生に、資料や印刷物を寄贈していただく。さらに先達の経験したことを記録し保管する。第三に、これらを共同作業によって継続的に進めることである。

今回の農村伝道シンポジウムはそれぞれ一人一人が本校に思いを深くはせるような意義深いものになった。このような鋭い切り口から歴史を掘り起こす端緒を示してくださった戒能信生先生に感謝したい。

修養会報告

「霊性と禅キリスト教」

三年　北口沙弥香

本年度の修養会は、七月四日から五日、一泊二日の日程で行われた。講師に新約聖書学者であり坐禅の指導もされている佐藤研さんをお招きし、坐禅指導をしていただくというのが主な内容となった。学生から「坐禅について学びたい」という声があがり、このような企画となった。また、校長も以前、農伝のカリキュラムを「自分自身を深く掘り下げる『個人的霊性』とこの世界に奉仕する『社会的霊性』の二本立で考えたい」というビジョンを示していた。農伝は「社会的霊性」を大事にしてきた神学校であり、その反面「個人的霊性」を軽視してきたという批判があろうが、今回の修養会は「個人的霊性」というものを涵養する機会となったと共に、カリキュラムの意図が目に見える形で実現する機会のひとつとなった。

一日目、学生と教師でディスカッションを行った。佐藤研『禅キリスト教の誕生』岩波書店、二〇〇七年、を事前学習した上で、『自分自身』にとっての『霊性』について

の分かち合い」「キリスト教と霊性」「キリスト教と坐禅をすること」をテーマとした。プロテスタント信仰を持つ者にとってなじみのない「霊性」という事柄について、それぞれがそれぞれの切り口で思いをわかちあうよい機会となった。二時間があっという間にすぎることとなった。

二日目、朝の祈祷会を行った後、研修棟二階で佐藤研さんに坐禅指導していただいた。実際に坐禅(数息観)や経行(きんひん『歩く禅』)を行ないながら、「『禅』とは何か?」「坐り方」「坐禅の果実とキリスト教」等についてお話をいただいた。「キリスト教は肉体を軽視してきた宗教である。肉体に対するとらえ方が東洋と西洋では異なる。東洋では、いちばん深い知恵は肉体にあると考える。『丹田』に根源がある。キリスト教も身体的なものの中にある知恵を深めていくべき。肉体が保っている知恵を活性化させることが坐禅であり、それをキリスト教も取り入れていくべきだ。キリスト教は修行というものを嫌ってきた。それは間違いである。身体の知恵を最大に生かすのが『行』である。」という趣旨のことを伺った。坐禅は「体験知」である。キリスト教、特にプロテスタントは体験というものを軽視する傾向にならざるを得なかったことを鑑みると、その反省に立つために「行」を取り入れていくことは有効であるように思う。

個人的には、朝の祈祷会のときのことが印象に残るものとなった。朝の祈祷会の奨励も佐藤研さんにお願いした。マルコ一六：六～七から「禅と復活」についてであった。その中でトマス福音書の言葉と作者不詳の詩「A Thousand Winds（千の風）」を紹介された。Liberaというイギリスのボーイソプラノのグループが歌うバージョンのその歌を聴き、涙があふれた。奨励のあと一〇分の沈黙の時間を持った。礼拝堂の外を雨上がりの風が吹き渡るのを、小鳥たちの美しいさえずりを聴いた。復活したキリストを沈黙によって見出すという体験をそこでしたのであった。

トマスによる福音書七七「イエスが言った、『木を割りなさい。私はそこにいる。石を持ち上げなさい。そうすればあなたたちは私をそこに見出すであろう』。」

〈新講座紹介〉

「禅キリスト教入門」

担当講師　佐藤　研

（前立教大学教授）

上記「修養会報告」にもありますように、農村伝道神学校における「霊性の養い」として、現場の神学の実践と追究による「社会的霊性」の養いと共に、身体の神学の実践として「キリスト教的瞑想」の大切さを自覚し具体化して参りました。

これまでも「霊性とキリスト教倫理」(担当：石井智恵美)を開講して参りましたが、この度、二〇一四年度の新講座として「禅キリスト教入門」を佐藤研氏に担当していただくことになりました。講義では「坐禅」の実践指導もしていただきます。

クラスの定員は三〇名です。公開講座とし、聴講生を受け付けます。

（校長）

〈逝去者〉

学生時代の谷口繁一先生

九回生　岩高澄

谷口先生は、農伝第八回生で、在学中は旧姓で「林」姓でしたが、私の一年先輩に当たります。

神学校卒業と共に、福井県大野教会に赴任され、昨年（二〇一三年）九月二九日に八九歳で召天されるまで、一つの教会で伝道、牧会の任に当たられました。

私は、卒業以来、名古屋での同窓会で一度お会いした程度で、在学中の思い出しか残っていないのですが、神学校では学生とは言え、社会経験も十分お持ちでしたので、午後の農作業などは指導者として私たちをリードしてくださっていました。特に雑木林や果樹などの手入れにたけておられたようです。

また、散髪もされていて、私も何度か調髪していただいたことがありました。

農作業が日課であった当時の思い出として、今も懐かしく思い出されます。

《聴講生募集》

農村伝道神学校では以下の講義を公開して信徒の宣教力養成および教職の継続教育に力を入れています。神学校の豊かな自然の中で、ご一緒に学びませんか。聴講をお申し込みください。なお、「集中」とあるのは集中講義です。詳細は事務室にお問い合わせください。

・聴講料（一科目）通年三万円（半期一万五千円）
・「科目要項」「聴講願い」をご希望の方は事務室までお申し込みください。
・前期：二〇一四年四月八日（火）～七月九日（水）
・後期：一〇月七日（火）～二〇一五年一月二七日（火）

◆二〇一四年度聴講可能科目と担当講師

・農村伝道論（加藤久幸）集中
・農業概論（池迫直人）
・解放講座
性差別（平良愛香）
障がい者差別（島しづ子）集中
・実践神学特講（大倉一郎）
・説教学（北村慈郎）
・説教演習（北村慈郎）
・牧会心理学（山崎正幸）
・牧会心理学（大西秀樹・石田真弓）集中
・アジア諸語
（ハングル：金南昕）
・旧約概論（牧野信次）
・旧約釈義（高柳富夫）
・ヘブル語文法（飯郷友康）
・旧約原典（飯郷友康）
・旧約特講（永野茂洋）
・新約概論（井上大衛）
・新約釈義（絹川久子）
・ギリシャ語文法（吉田忍）
・新約原典（吉田忍）
・新約特講（山口里子）
・旧約聖書時代史（飯郷友康）
・教会音楽（小海基）
・霊性とキリスト教倫理（石井智恵美）
・教義学（織田信行）
・日本近現代史（武田利邦）
・日本キリスト教史（戒能信生）
・古代中世教会史（大谷哲）
・キリスト教教育（本田栄一）
・キリスト教概論（滝澤貢）
・禅キリスト教入門（佐藤研）

学事報告

◇一二月六日（金）待降節礼拝メッセージ：陣内大蔵氏（東美教会牧師）
◇特別講義を行なった。
一二月一〇日（火）～一二日（木）「キリスト教の成立と反ユダヤ主義」上村静氏
一二月一三日（金）「キリスト教というアイデンティティー」佐藤研氏
◇一月二八日（火）農村伝道シンポジウム開催
講師：戒能信生氏（東駒形教会牧師）
◇二月一二日（水）～一四日（金）
解放講座集中講義：「部落解放」
講師：小林明氏
◇二月一七日(月)～一九日(水)
校長は日本バプテスト神学校教師研修会講師「聖餐について」
◇二月二六日（水）二〇一四年度生第二回入学試験。一名合格。
◇三月四日（火）午後一時半第六四回卒業式。一名卒業。

理事会・評議員会報告

鶴川シオン幼稚園の古谷園長が任期満了を迎えるにつき、後任園長の選考をおこなっていたが、候補者を決定し、三月一七日に開催する理事会・評議員会に提案することになった。

農村伝道神学校の高柳校長の任期を更新し、引き続き任に当てることを決定した。

鶴川シオン幼稚園の将来について、内閣府が推進している「新制度」のなかでどのような幼稚園のありかたを選択していくかの検討を重ねている。

農村伝道神学校の教育を充実させるため、兼任教師の勤務態勢変更を検討、実施する。

資金管理運用委員会は、昨今の経済情勢を踏まえ、資金管理運用規程の変更を提案した。

神学校維持献金や後援会献金に関し、税法上の寄付控除が適用できないか検討していたが、現時点で困難であると考えられる。（書記　横野朝彦）

お知らせ

◇入学式　四月二日（水）午後一時半、神学校礼拝堂にて
説教：「主体を鍛える」校長
聖書：ローマ書四：一～五
◇始業講演　四月三日（木）午後一時～二時半
講師：佐藤研氏
題：「現代神学者の課題」
公開としますので、聴講希望者は事務室にお申し込みください。聴講料は無料。

―― 2015年度入学案内 ――

■教育目標

・農村・地方教会に仕える牧師・信徒伝道者を養成します。そのため現場、農業実習、共同生活を大切にします。
・貧困・差別・人権という諸問題を神学の課題とします。
・戦争責任を明確にしアジアの人々と教会との対話の中で神学教育を行います。

■受験資格

①日本基督教団に限らずプロテスタント教会に所属し、原則として受洗後１年以上（洗礼式を行わない教派に関しては、それに準ずるもの）の教会生活をしていること。
②牧師・信徒伝道者となる召命を受け、所属教会が推薦すること。

■修業年限　４年

■入学試験

第１回　2014年11月26日（水）
第２回　2015年２月25日（水）

■入学試験科目

(1) 小論文 (2) 新約聖書・旧約聖書
(3) 面接
・学校案内・入学願書・過去の試験問題等は神学校事務室まで請求下さい。

※ 学校見学・体験入学

希望する方は事務室に申し出下さい。授業参加、食堂の昼食、教師との面談をすることができます。

農村伝道神学校
〒195-0063 東京都町田市野津田町2024
Tel 042-735-5775　Fax 042-735-5711
Eメール：noden@pony.ocn.ne.jp
ホームページ：http://www11.ocn.ne.jp/~noden/
振替番号
農村伝道神学校　00160-6-18485
農村伝道神学校後援会　00120-6-24418